

太宰府の文化財

(410)

史跡宝満山周辺の石造物（板碑）

―伝金剛兵衛の墓―

鎌倉時代後期～南北朝

太宰府市の北東部にそびえる宝満山の山裾には竈門神社があります。竈門神社は近年、縁結びの神様として若い女性を中心に参拝者が増えており、その数は10万人にも届こうとしています。

さて、賑わう参道から少し外れて、式部稻荷社の西側にあたる小高い丘



に石造物がひっそりと集中している一角があります。今回はその石造物

群のなかの1つである板碑を紹介いたします。日あけ地藏堂に向かつて左裏にあるこの板碑は花こう岩でつくられた石製板碑です。残念なことに塔

身部分が折れたため、補修されています。台座からの高さ163cm、下部

最大幅38cm、最大厚30cm。頂部



は山形としてその下部に二重線と額部を設けるといふ、板碑の典型的な特徴を良く表しています。その下に縦長の塔身と基礎があり、塔身の平面上部に梵字の種字（文字）を配置しています。太宰府市周辺で、これだけの大きさでなおかつ、きちんと石の複数の面を整形加工して作られた板碑は少なく、貴重です。太宰府周辺の大多数の板碑は、自然石の形のまま、一面のみを整形して利用した長さ50cm以下の小さいものです。

この板碑の塔身には、蓮の花が表現された蓮座の上に不動明王の梵字の種字へ「カーン」が彫られています。蓮座もきちんと彫っており、堅くして加工が難しい花こう岩製の板碑としては丁寧な作と言えます。この種字を

カーンとみると、興味深いのはその種字の下に休止符（ダ）がついていることです。これは、

本来は陀羅尼や真言といった文章の終わりを示す記号なのですが、種子の終わりにつく場合は、その仏・菩薩の功德を衆生に施与する意味を強く表したものとされています。不動明王は密教の本尊である大日如来の化身で、密教をはじめ、修験道でも信仰され、その功德は、治病・安産・災害の除去・怨敵調伏・財福を得るなどの多くの願いをかなえてくれるとされています。

また、この板碑は金剛兵衛の墓という言い伝えがあります。文献によると、金剛兵衛という刀鍛冶職人の一派は室町時代中期には全国的にも有名でした。ここ宝満山の山伏に出自を持つ鍛冶職人で、このあたりに住んでいたという伝承が残っています。金剛兵衛については改めてご紹介したいと思います。

さて、昨年度から史跡宝満山について本市と筑紫野市は共同で史跡の保存活用計画を作成しています。本年度で計画を策定し、それを元に史跡の保存活用を行っていきます。今後も宝満山やその周辺の文化財・文化遺産を紹介したいと思います。

文化財課 高橋 学